

32

「下竄」について

奥野 繁生

さいたま市

宋代、銭乙『小兒藥証直訣』巻上・腎虚に「又腎氣不足則下竄，蓋骨重惟欲墜於下而縮身也」という文がある。この「下竄」について、本文では「蓋し骨重く、惟だ下に墜ちんと欲して、身を縮むるなり」といい、「下竄」を「縮身」として説明しているが、「下竄」についての解釈は、爾来一定しない。張山雷は『小兒藥証直訣箋正』において「下竄骨重，亦頗費解」としているほどである。

『古今医統大全』幼幼匯集・上・五臟虚実主病では、「潔古曰、下竄者、腎水不足、兩足熱、不喜衣履足」を引き、腎水不足により兩足が熱し、履物を身につけたがらないとする。

兪景茂編訳『小兒藥証直訣類証積義』（貴州人民出版社1984）は「下竄」について「病勢が下に向くことを指す」とし、「骨重脚軟，或蹠縮身体」と解する。

また兪景茂・竹剣平主編『小兒藥証直訣訳注』（中国人民大学出版社2010）では「脚膝無力」と訳している。

いっぽう『古今医統大全』幼幼匯集・上・驚風総論には、「直指方云……男眼上竄，女眼下竄」という記述があり、搐の症状で男児は眼が上を向くことを「上竄」、女児は眼が下を向くことを「下竄」といっている。

「竄」はのちに驚風八候のひとつに数えられ、『医宗金鑑』幼科心法要訣では「竄則目直常似怒」と説明されるため、「下竄」を目が下に向くことと解せないこともない。しかしこれはあくまで驚風の症状であり、「腎氣不足」によるとする『小兒藥証直訣』の文意とは必ずしも合致しない。本文中における目の記述としては、「目中白睛多」があるが、上とも下ともいっていない。

ところでこの「下竄」なる語は、『小兒藥証直訣』において、もう一箇所出てくる。巻上・五臟相勝輕重に「心臟病見冬，火旺心強勝腎，当補腎治心。輕者病退，重者下竄不語。腎怯虚也」とあるのがそれである。ここでは「下竄」と「不語」とが併記され、それが「腎怯虚」の症状であることを示す。

「腎虚」の本文は「又」ではじまり、「腎氣不足則下竄」と述べ、「蓋」以下に続く。するとこの「腎氣不足則下竄」は、どこかからの引用であると考えられる。「蓋」以下はその解釈である。この引用元が「重者下竄不語。腎怯虚也」であるなら、「腎氣不足則下竄」の後には本来、「不語」の二字があったと思われる。

「不語」といえば、『小兒藥証直訣』巻上・腎怯失音相似に、「病吐瀉及大病後，雖有声而不能言，又能嚙菜。此非失音，為腎怯不能上接於陽故也。当補腎，地黄丸主之。失音乃猝病耳」とある。ここで「不能言」となるのは、「腎怯」により「上に陽に接することができない」ためであるとされる。

竄は、かくれる意であるため、主語があるのが普通である。眼の症状であれば、搐により眼が上を向いて瞳の部分が隠れることを指す。

ここで「腎虚」の文と「腎怯失音相似」の文とを重ねてみると、「腎氣不足すれば則ち下に竄れ語らず」となる。下に竄れるのは腎気であり、それが「上に陽と接しない」ために「語らず／言う能わず」となる、と解釈できる。

『小兒藥証直訣』は閻孝忠の編集にかかるため、どこまでが銭乙の文であるか、疑われることも少なくない。「蓋」以下の解釈は、おそらく閻孝忠によるものだろう。